

善教寺宝物

『家長公旅順詩卷』

解説 木許 博

【箱書】「家長公旅順詩卷 臨末記念」

長公書旅順詩數首以賜憲一、実本年三月四日也。

曰、コレ今生ノイトマコヒ。衛生專一念佛專一。

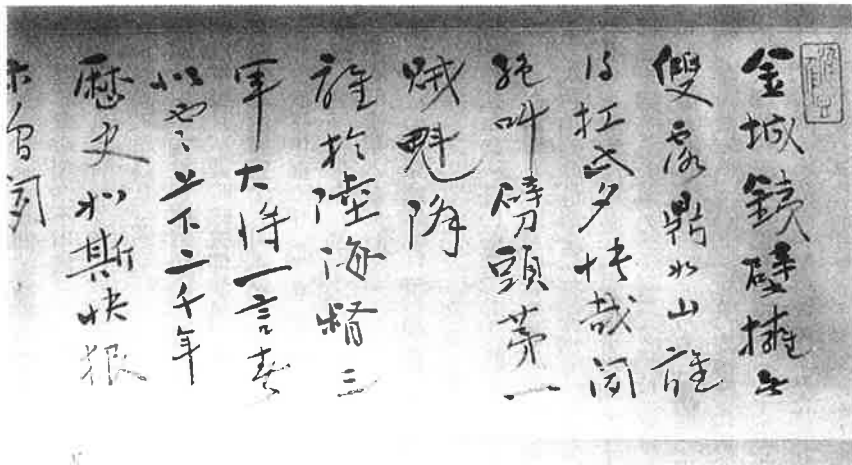
而、同月十八日示寂、嗚呼。

卅八年八月六日 弟憲一記

(長公、旅順詩數首を書き以て憲一に賜ふ)

【解説】この「旅順詩卷」は、戸次妙正寺の小栗栖香頂(号蓮舶)から弟、佐伯善教寺の小栗憲一(号布岳)に形見として書き贈られたものである。それも自分の死を予感して「今生の暇乞い」に、と書き記している。示寂する一四日前とは思えない筆跡である。

翌年三月、小栗憲一は兄の遺作に自作の『旅順要塞図』を添えて一巻の軸物に表装した。「家長公」とは長兄小栗栖香頂の尊称であろうか。



【本文】

○金城鉄壁擁無双

處鼎水山旌及扛

此夕快哉聞絶叫

劈頭第一賊魁降

○旌於陸海督三軍

大将一言春似雲

上下二千年歴史

如斯快報未曾聞

【書き下し】

金城鉄壁、擁すること無双

鼎水に扱る山に旌、扛に及ぶ

此の夕、快哉絶叫を聞く

劈頭第一賊魁降る

旌は陸海に於いて三軍を督る

大将の一言は春の雲に似る

上下二千年の歴史

斯くの如き快報は未だ曾て聞かず

【大意】

天下無双の堅い要塞も、鼎水（旅順港）の山岳地につ

いに旌が上がった。この夕万歳の叫びがおこり、戦いの

はじめロシアの司令官は降伏した。

陸海三軍に勝利の旌があがり、大将のひと言は物静か。

二千年の歴史上、このような愉快な報せははじめてである。

○七十六年春

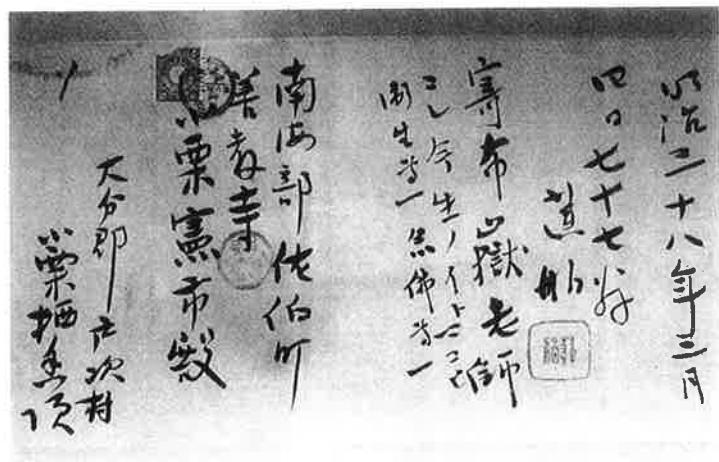
非々は々之何言

萬事齊歸不二門

○七十六年の春

非々は々何をか言わん

萬事齊しく不二の門に歸す



七十六年唯独笑

七十六年唯独り笑う

孤雲加夢去無痕。

孤雲夢を加え去つて痕無し。

【大意】

是は是、非は非をもつて貫くのみ、すべては皆大乘解脱の教えに収まる。七十六年の間ひとり笑い、夢を見つづけ今死に及んですべて無である。

○一月二日岡本電

昨夜旅順陥落

突然電報来曰旅順陥落

○一月二日岡本より電報

昨夜旅順陥落

突然電報来たりて曰く旅順

陥落すと。

始則疑是夢再思認無錯

始めは則ち是れ夢と疑うも

再思して錯無きを認む。

人心祈平和天意嫌残虐

人心は平和を祈り天意は残

虐を嫌う。

群怨之所帰須鉄且面博

群怨の帰する所は鉄を須い

且つ面博す。

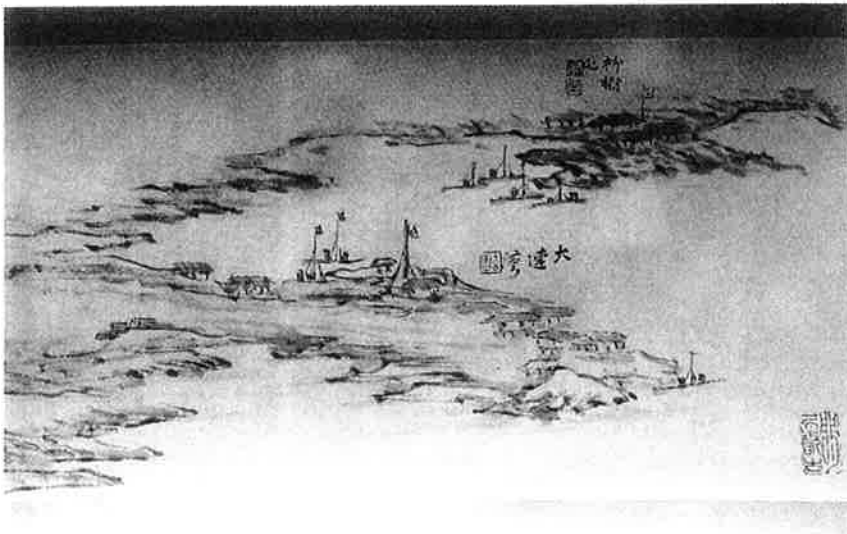
露帝不遜揃五州企横掠

露帝不遜にして五州をはか

り横掠を企つ。

東亜何處是先從滿州着

東亜は何処も是こ先ず滿州



旅順天然險霸氣方磅礴

山海扼要害大業可以作

戰艦廿萬噸水雷無數泊

砲台層々出穹窿憑高鑿

進則墮叫喚退則泣炮烙

用尽天下智滿韓一時攫

日本聖天子下詔向内閣

東鄉薦大將乃木撰男爵

二公天下傑大任堪委託

容衆頗寬仁臨事極謹恪

より着す。

旅順は天然の險にして霸氣
方に磅礴たり。

山海は要害を扼し大業以て
作すべし。

戰艦二十万屯、水雷は無數
に泊し、

砲台層々穹窿に出で高鑿
に憑る。

進めば則ち叫喚に墮ち、退
けば則ち炮烙に泣く。

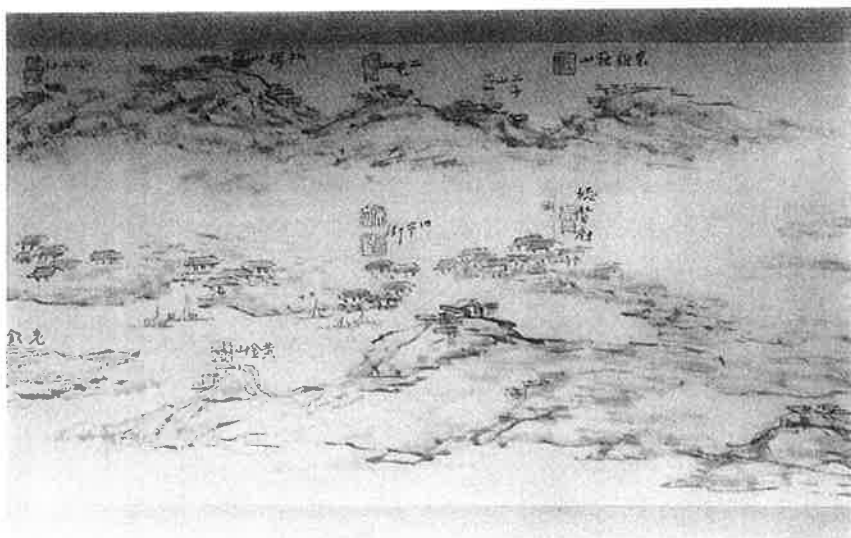
用い尽くす天下の智、滿韓
一時攫る。

日本の聖天子、詔を下して
内閣に向う。

東郷を大將に薦め、乃木を
男爵に撰す。

二公は天下の傑にして大任
委託に堪う。

衆を容るるに頗る寬仁、事



鎖港断食道衝壘截鉄索

譬提山大弾任手撃燕雀

旗白列強笑電激全震愕

天地改顔色春日照鸞鶴

奉天難孤立戦鼎喪一脚

借問黒鳩公日夕感何若

に臨んで極めて謹愷きんかくなり。

港を鎖し食道を断ちて壘を衝き鉄索を截る。

譬えば提山大弾に任せ燕雀を手撃す。

旗白し、列強笑電激しく全て震愕し、

天地は顔色を改め、春の日は鸞鶴を照らす。

奉天は孤立して戦い難く鼎は一脚を喪う。

借問す黒鳩公、日夕感ずること如若と。

【大意】

だしぬけに旅順陥落の電報入る、はじめは夢かと疑うも見直すと間違いないと解る。人心は平和を願う天子はむごいことをきらうが、国民のうらみは敵をこらしめて縛りあげるように要求した。

ロシア皇帝は思いあがつて世界略奪をはかる。東亜はどこでも満州から行き、旅順は天然の要害の地で士気が



満ちている。山や海はとりでをかまえて大計画を実行で
きる。戦艦二十万屯、水雷無数に配置され、砲台は重な
り備わり、深い穴を高所にうがって配されている。進め
ばわめいてたおれ、退いても砲火にたおれる。考えあぐ
ねて知恵をしばらく満州韓国を手に入れることを考えた。

日本の聖天子（明治大帝）は内閣に詔勅を下し、東郷
平八郎を大将に任じ乃木希典は男爵に叙した。二人とも
すぐれた傑人で大任を全うできた。人には寛容でやさし
く、行動はひじょうにつつしみぶかい。港を封じ食道を
断つて陣地を攻めて鉄条網を破り、山全体に大砲をうち
こみ、兵は手うちで倒す。

ロシアの敗北に列強の国々は日本をたたえ大いに驚く。
天地は様変わりして春の日はめでたい光を放っている。
奉天は孤立して戦えず、敵は大事な拠点を失った。たず
ねたい、敵将クロバトキンは毎日何を感じているのか。

○旅順鎮守府

魯貨五億圓十年築要塞

我死三萬人遂使賊軍退

○旅順鎮守府

魯貨五億圓、十年要塞を築

く。

我死三萬人、遂に賊軍をし

臥薪嘗胆情天日照敵愾

恢復報天千萬死亦不悔

嘩々黄金山春風払汚穢

嶺東鎮守府遼遼豈可再

て退かしむ。

臥薪嘗胆の情、天日照敵愾を

照らす。

恢復して天に報じ、千萬の

死も亦悔いず。

嘩々たる黄金山、春風汚穢

を払う。

嶺東の鎮守府は遼に還るこ

と豈再すべけんや。

【大意】

魯国（ロシア）の金で五億圓、十年かけて要塞を築い
た。我が方の戦死者は三万人、ついに賊軍を退けた。艱
難辛苦して報復する志、天も怒りを発した。失ったもの
をとりもどし天に報告する、千万の死も悔いしない。さわ
がしかつた黄金山も春の風が汚れを清めている。嶺東の
鎮守府は遼東に復することはくりかえしてはならぬ。

○副嶋老伯贈余日

天皇覽賀御相震

戸々旗竿昇旭新

○副嶋老伯が余に贈りて曰く

天皇覽じて賀す御相震う。

戸々の旗竿、昇旭新たなり。

此夕敵人納降至
此の夕、敵人納降至る。

由來元日は佳辰
由來元日はれ佳辰。

呈香頂上人
香頂上人に呈す

【大意】

天皇（明治）はご覧になって玉顔はふるえておられた。家々の旗竿には昇る日の丸が輝いている。この夕、敵は降伏を申し入れた。以来元日をめでたい日とするのである。

○伯一月卅一日薨 嗚乎悲哉天地間無復、良朋友七十八歳也、余以此詩贈天学良法公

明治三十八年三月四日 七十七翁 蓮船 香頂印

【大意】

伯（副島）は一月三十一日みまかった。ああ悲しいかな。再びこの世に帰ることはない。良き友で七十八歳。私はこの詩をもって天学良法公に贈る。

○寄布嶽老師（布嶽老師に寄せる）

コレ今生ノイトマコヒ 衛生専一 念佛専一

【大意】これこの世のお別れ、命を第一に念仏を第一にな

されよ。

【封書】

南海部佐伯町 善教寺 小栗憲市殿

大分郡戸次村 小栗栖香頂

〔語註〕

不二門（不二法門、大乘）、面縛（両手をしぼる）
磅礫（満ちふさがる）、穹窿（弓状のほら穴）

高鑿（火あぶり）、鸞鶴（天子の乗り物）

※副島老伯（副島種臣）そえじまたねおみ

文政11年（一八二八）〜明治38年（一九〇五）

旧佐賀藩士、官僚、政治家、書家。明治20年、宮中顧問官。明治24年、枢密院議長。明治25年、内務大臣。

